

会長の挨拶 34 一職種一会員制の本質—その 1—

ロータリーが職業分類の作業を基とし一職種一会員制を柱とし、さらに例会出席をいま一つの柱とするクラブ活動であることは前回までの解説から明らかになった。そこでここでは、ロータリーは一職種一会員制の理論的本体をどのように考えているかという重要な問題が残る。一職種一会員制の原則は元来歴史的には、資本制社会の企業間の自由競争から生じる諸々の非友好的要素をクラブ親睦の場に持ち込まないという理論的実体をもっており、この原則が 1905 年 2 月 23 日のシカゴ・ロータリーの第一回の会合でポール・ハリスによって披露されていたのである。

しかし、ロータリー運動の中から奉仕概念が生まれ出るや、ロータリアンは、この一職種一会員制の原則を奉仕の実効性の角度から再検討し始めたのである。一派のロータリアン即ち、シアトル・クラブのロータリアンの主張するところによると、奉仕クラブは奉仕家を以て構成すべく、すでに奉仕家の存在がロータリーの存在とは無関係に地域社会内に存在し、それが各職種の中に何名か不規則的に存在する以上、ロータリー・クラブが一職種から一名しか会員を採用できない仕組みをとっているのは、ロータリーの奉仕の実効性を著しく弱体化するものであると考えたのである。

(小堀憲助著 『ロータリー思想の理論構造』より引用)